



# 初公開! 銀行が 金を貸してくれても 企業が倒産する理由

銀行がお金を貸してくれても、企業は倒産します

「銀行から融資が実行されました。これで当分は安泰です」  
経営の現場で、この言葉が耳にすることがあります。事業計画をまとめ、担当者との議論を重ね、ようやく「貸します」と言われた瞬間。その達成感、確かに大きいものです。しかし、ここに一つの落とし穴があります。

回収すること。そのため、貸し倒れを防ぐための分析能力は卓越しています。しかし、新規事業の成否を見抜く専門家ではありません。事業計画書は、あくまで融資判断の材料です。審査を通ったからといって、商売が成功するという意味ではありません。

「銀行が認めた」この商売は間違いない」  
この解釈は、危ういのです。

融資判断の中心にあるのは、決算書、返済履歴、財務体質など過去の実績です。

しかし、それは「過去」の話です。未来を見通しているものではありません。将来性に期待を寄せることはあっても、成功を保証しているわけではないのです。

貸せる理由は「回収できるから」

では、なぜ銀行は貸すのでしょうか。答えは明確です。回収の手段があるからです。

担保がある。保証がある。返済能力が計算できる。万が一の場合の出口が見えているから貸せるのです。(逆を言えば、上記の担保余力、返済能力を見せればお金は借りられます。ここは融資を申し込む際には覚えておきたい点です)

「借りられた」事業が評価された」というより、「借りられた」回収可能性が確認された」という方が、実態に近いでしょう。

時代が変わっても本質は変わらない

市中には資金がジャブジャブと余っていて(2026年1月時点、マネーサプライは1279兆円、過去最高)、積極的に融資を提案してくることもありません。しかし、金融機関の本質は今も昔も同じです。数字で判断し、契約に基づき、淡々と回収する。感情ではなく、仕組みで動いていきます。経営者がこの前提を理解しているかどうかで、判断の質は変わります。

経営者が向き合っていくべきもの

銀行から借りられたこと

とに安心するのではなく、自らの戦略の精度を問い続けること。10年後の姿を描き、3年の道筋を数値化し、人と資源をどう配置するかを考え抜く。ここに経営者の仕事があります。繰り返しますが、銀行は資金を提供してくれません。しかし、未来は設計してくれませんか。

(株)プレジデントビジョン  
石原 尚幸  
代表取締役



いしはら・なおゆき。1973年生まれ、愛知県名古屋市出身。96年、上智大学経済学部経営学科卒業後、出光興産に入社。京都支店、関東第二支店を経て05年本社・販売部企画課に配属。08年に独立起業し、2012年法人化した。